

ぼっちゃんは、絵をのぞいて見ながらいました。

「そんなにちっぽけじゃないな……おや！　ねちゃったよ、このヒツジ……」

こうして、ぼくは、王子さまと知りあいになりました。

3

王子さまが、いったい、どこからきたのか、それがわかるまでには、だいぶ時間がかかりました。王子さまは、ぼくにいろんなことをきくのですが、ぼくのきくこととなると、いつこう、きいているようがありません。ひょいとした拍子で、王子さまのいったことから、すこしずつ、ことがほぐれて、しまいに、やっと、いろいろなことがわかってきたというありさまです。たとえば、王子さまは、はじめてぼくの飛行機を見たとき（ぼく、飛行機の絵なんか、ごめんです。あんまりこみいってて、とてもぼくの手におえません）、こう、ぼくにききました。

「それ、なあに？　そのしなもの？」

「しなものじゃないよ。これ、飛ぶんだ。飛行機なんだ。ぼくの飛行機なんだ」

ぼくは、鼻を高くしながら、鳥のように飛べる人間だといってやりました。すると、王子さまは、大声をあげていました。

「なんだって！ きみ、天から落ちてきたんだね？」
「そうだよ」と、ぼくは、しおらしい顔をしていいました。

「へええ！ へんだなあ、そりゃ……」

王子さまは、そういつて、たいそうかわいらしい声で笑いました。笑われたぼくは、とても腹がたちました。天から落ちるなんて、ありがたくないことなんですから、しんけんに考えてもらいたかったのです。やがて、王子さまはまたこういいました。

「じゃあ、きみも、天からやってきたんだね！ どの星からきたの？」

そのとたん、王子さまの夢のような姿か、ぽうつと光ったような気がしました。ぼくは、息をはずませてきました。

「じゃあ、あんたは、どこかほかの星からきたんだね？」

しかし、王子さまは、なんの返事もしません。ぼくの飛行機を見ながら、しずかに首をふつ

ています。

「そうか、じゃ、そう遠くからきたわけでもないな……」

そういつて、王子さまは、長いこと、考えこんでいましたが、やがてポケットから、ぼくのかいたヒツジの絵をとりだして、こんどは、さもだいじそうに、それを、じつとながめました。

どうやら、へどこかほかの星のことをいつてゐらしい王子さまの口ぶりに、ぼくは、どんなにつりこまれたことでしょう。で、そのことを、もっとくわしく知ろうとしました。

「ぼっちゃん、あんた、いったい、どこからきたの。へぼくんとこ」って、それ、どこにあるの？ ぼくのかいたヒツジ、いったい、どこへつれていくの？」

だまって考えこんでから、王子さまは、こう答えました。

「ああ、よかった。きみのくれた箱があるんで、夜になったら、これ、ヒツジの家になるよ」

「そうだね。それに、あんたが いい子なら、ぼく、綱もあげるよ。ひるま、それでヒツジをつないでおくのさ。それから、棒ぐいもね」



「こーいわれて、王子さまは、ひどく気にさわったようでした。
「つないでおく？　へんなこと、考えるじゃないか！」
「でも、つないでおかないと、どこへでもいつちまうよ、迷子まいこになってさ……」
ぼっちゃんぼっちゃんは、また、声をたてて笑わらいました。
「だって、どこへもいくとこ、ないじゃないか」
「どこへだってさ。まっすぐどんどん……」
すると、王子さまは、はじめの顔になっていいました。
「だいじょうぶなんだよ。ぼくんとこ、とってもちっぽけなんだから」
そして、どこかしら、しずんだ顔になって、いいました。
「まっすぐどんどんいったって、そう遠くへいけやしないよ……」



しょうわくせい
小惑星，B-612番の王子さま。